

## 四 インド・ヨーロッパ語族の各語派

どのような言語かということになりますと、誰もが付き合える問題ではありませんので、どのような歴史的背景の下にどのような文献が残されているか、ということを中心にした言語派について見てみましょう。

### アナトリア語派 (Anatolian)

この語派はヒッタイト語に代表されます。ルーヴィイ語の方が少し古い形を残しているようですが、ルーヴィイ語、ヒッタイト語、象形文字ルーヴィイ語、パラ語、少し遅れて小アジアに残っていたリュディア語、リュキア語があります。この語派の専門家は日本にもおられますし、周辺のエジプト、小アジアからメソポタミアに懸けてのインド・ヨーロッパ語

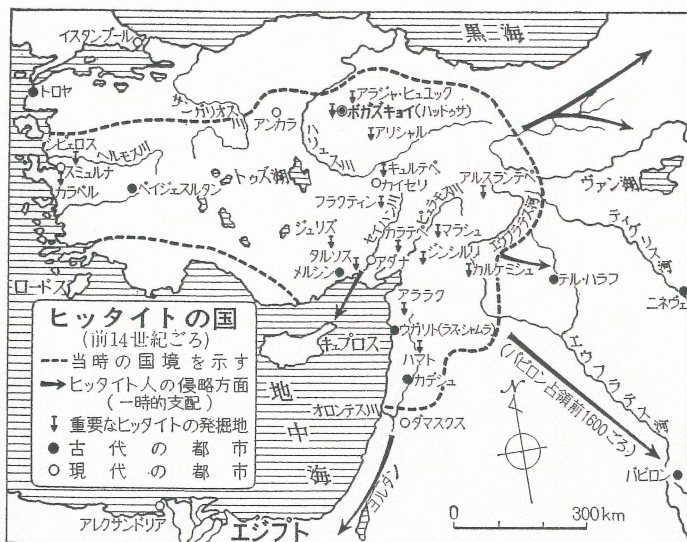


図4 ヒッタイト王国

族以外の資料を専門とするオリエント研究の積み重ねもありますので、歴史学者の知見とも合わせ、総合的な検証が待たれます。

資料としてはボガズカール（ボガズキョイ、図4参照）というアンカラより東方の地にある丘が一九〇六年以降発掘され、出土した粘土板をホウロズニー（Bedřich Hrozný）というチェコの学者が解読しました。不思議なもので、解読した文そのものの解釈には誤りがありましたが、結論は方向として正しかったのです。「パンを食べ、水を飲む」という文が発点になり、新しい印欧語が発見されました。その後発見された粘土版文書はかなりの量にのぼっています。紀元前十七から十三世紀くらいにかけてヒッタイト語の文書が残っています。発掘されたのは国の中央文書館でした。なぜそのような設備があったかという点、国境に関する取り決めその他の契約文書を、定期的に新しい粘土版に彫り直し、コピーをとって、各要所に配備していたからです。そういう契約社会があったということは重要な点です。印欧語の中で最も単純な文法の姿を示しますが、どうして文法が複雑でないのかということの裏にも大きな秘密があると思われれます。後で触れます。

### インド・イラン語派 (Indo-Iranian)

この語派は普通二または三の語派に分けられます。三というのは、ヌーリスターン諸語と書いておきましたが、ヌーリスターン「光の国」、以前カフィール「邪教徒」の土地と呼ばれたアフガニス

は  
西

タンの山中に現在話されている言語グループ次第です。この言語群をイラン語と判断するか(例えばヴィーンのマイルホーファー Manfred Mayrhofer)、インド語とするか(「ヌーリストーン」の命名者ドイツのブッドウルス Georg Buddruss)、あるいは第三の独立系統を立てるか(ノルウェーのモルゲンスチエルネ Georg Morgenstierne)、問題は解決には至っていません。最終的結論を別として、少なくとも作業仮説としては第三の立場を採っておくことが研究上効率的です。インドとイランの間に別のもう一派が山中に孤立して今日まで来たのだと考えます。

イラン語には、既に触れましたようにゾロアスター教(マズダヤスナ教)の『アヴェスタ』の言語(東南イラン方言)、ダリウスをはじめとするアケメネス朝諸王の碑文(紀元前六世紀末から)に見られる古ペルシャ語(西南イラン方言)、断片的に語彙が回収されるメディア語(西北イラン方言)があります。中期になりますと、メディア語の後裔であるパルティア語、中期のペルシャ語、さらに、東北方言群に分類されるコータンサカ語、ソグド語、バクトリア語、コワレズミー語が、中央アジアの仏教、マニ教、キリスト教、ゾロアスター教文献や碑文、コイン等に残されています。現代のペルシャ語は古ペルシャ語以来の発展形です。クルド語は東北語群から出発します。アフガニスタンのパシュト語、コーカサス山中に残るオセツト語、ソグド語の発展形でタジキスタン山中に残るヤークノービーも東北イラン語群の子孫です。ゾロアスター(Zarathustra)の年代は伝承では紀元前六世紀、一般に紀元前一〇〇〇〜八〇〇年と考えられていますが、彼自身のことを含むと

考えられる古アヴェスタ語（「ガーサー」garšaなど）はインドの『リグヴェーダ』よりもいくらか古風な言語で、紀元前一〇〇〇年以前に遡るようにも思われます。

「イラン」という語自体は新アヴェスタ語と古ペルシヤ語に見られる「アリヤ人たちの」という意味の複数所有格 *aryānān* が中期ペルシヤ語形 *āryān* または *āryānān* を経て変化した現代ペルシヤ語形 *īrān* *īrān* を写したものです。つまり、イラン語派の人々は自分たちを「アリヤ」と呼んでいました。

これに対し、インドに入った人々は「アーリヤ」と自称していました。語頭の「ア」の長短が異なるだけでよく似ています。語義を詳しく詮索することは控えますが、いずれもアリ（敵または味方の）部族に属する者」からの派生形で、アリヤを「部族に属する」、アーリヤを「部族の風習に従う」意味に解するのが適切ではと私は考えています。インド語派、正確には「インドアーリヤ語派」の文献としては、紀元前一二〇〇年くらいに編集されたと思われる『リグヴェーダ』が最も古く、紀元前一〇〇〇年頃を中心に祭式用の祝詞（マントラ）が作られ、紀元前八〇〇年くらいから祭式の議論をする散文の文献が相当量伝承されています。これらのものは口頭伝承で伝えられました。インドでも文字は使えた筈ですが、祭官階級はことばの文字化を許さなかったことで、結局、ことばに関する営みを独占しました。また、そのおかげで今日までほぼ信頼できる形で、当時の姿が伝わっています。私たちの場合は様々な観点から学問的検証を加えることによって、本来詩人が語つ

たであろう形に復元してから読みます。その手続きの出発点としては、今日伝わるテキストで何ら支障はないという状況にあります。「古インドアーリヤ」語は古い段階の「ヴェーダ語」、遅れて登場するマハーバーラタ、ラーマヤナに見られる「叙事詩サンスクリット」、そして古典文学作品や諸学問の言語となった「サンスクリット」に大別されます。

「中期インドアーリヤ語」は、古インドアーリヤ語の傍らに口語として既に古くからあったものと思われませんが、文献言語としては所謂「プラークリット語」です。紀元前三世紀のアショーカ王碑文は現在まで実物が伝わるインド最古の文献ですが、各地方の中期インド語（プラークリット）で記されています。南伝の仏典に用いられる「パーリ語」も古い段階の中期インド語を代表します。ジャイナ教の教典には半マガダ語、ついでマハーラーシュトリーという方言が使われています。「中期インドアーリヤ語」から「はずれ落ちた」アプブランシヤという言語を経て、今日のインドアーリヤ系の各言語が成立してきます。ただし、途中経過が具体的に辿れるわけではありません。

インドアーリヤ語を話す人々は、紀元前一二〇〇年頃にはインダス上流で『リグヴェーダ』を編纂していますから、それ以前にカーブルの峠を越え、順次インダス上流域に入ってきていたことになりそうです。その人たちが、今日までに、これだけ言語文化圏を拡大してきました。

インドのことばとヨーロッパのことば

## ミタンニのアーリヤ人

『リグヴェエーダ』より古い資料に、楔形文字で残された「オリエントのアーリヤ語」があります。これはミタンニ (Mitanni) 王国の言語です。ミタンニの版図を図5に載せてあります。エジプトのアマルナ文書の中にバビロニア語で書かれた手紙が残されており、それらからミタンニ、エジプト、ヒッタイト間の戦争、婚姻の關係が再構成できます。ヒッタイトの王が例えばアメノフィス三世に手紙を送り、エジプト王妃となつている自分の娘に、どうかうしてほしいとか、あるいはエジプトの方から、その王妃があまりに愛らしいから、似姿を黄金の像に作つて送るようになどと言ふ内容が見られます。

ミタンニ王国は紀元前十四世紀にヒッタイト王国に併合されますが、その時の契約文書がアッカド語の資料として出土しています。ヒッタイトーミタンニとミタンニーヒッタイトの両版があります。これらの資料からミタンニの王室や貴族の名前が多数回収され、親子關係までかなり解ります。

彼らの名前は殆どがインドアーリヤ語で読める複合言語です。例えばトウシヤラタと書いてあればトウベーシヤラタ *tesaratha-* 「突進する戦軍を持つ者」と一般に解釈されます。インドに入ったアーリヤ人と同じ言語であるのか、それとも、偶々イラン系の言語がその時代に残つていたらこういう形であつたのか、あるいはインド・イラン共通時代の言語か、という三つの可能性があります。研究者にはその時に検討している原典に引きつけて見てしまふ傾向がありますが、年代その他から言つ



インドのことばとヨーロッパのことば

1の誕生

ナトリア語派と同じような古さが想定されることになりました。時代の問題と共に、インド・イラン共通時代の地理的中心はどこか、という問題が出てきますが、現在では、「バクトリア・マルギアナ考古複合」と呼ばれる考古学的発見との関連が注目されています。

さて、ミタンニでは王室や支配階級の男だけがインドアーリヤ系の名で伝えられおり、主たる構成員は系統不明のフルリ（フッリ）人です。背後には、非常に危ない話ですが、当時の植民活動の反映が推定されます。植民活動には色々な形式が跡づけられますが、ミタンニの場合は、特定年齢の男だけが村から自由に暮らすように追い出される、そういうタイプの植民活動の結果ではないかと思われまゝ。彼らの本拠地は別の場所にあったことになりました。追い出された若者たちは他の部族、村を襲い、女の人たちを自分の財産にし、男たちを皆殺しにして国をつくったと思われまゝ。同様のことは歴史上繰り返されています。ローマ帝国やフランク王国にも似た事情が推定されます。結局そういう形でミタンニ王国はつくられ、子供たちは母親と一緒に暮らすから母親の言語にやがて吸収される。フランク王国はフランスという名前を残して、実際にはローマ帝国のことばの末裔であるフランス語を話すようになって消滅します。ヒッタイトの資料には、男の子だけ隔離して言葉を教えるということが載っていると聞いています。ギリシャのスパルタにも同様の組織があったようです。植民活動の遠征隊に何歳から何歳までの男を派遣するという文書があると聞いたことがあります。確かめておりません。歴史学者も印欧語学者も、必ずしもそういう目で資料を扱って



きておりませんので、今後総合的な検証が望まれます。

### ヒッタイト語が簡素な文法体系をもつ理由をどう解釈するか

ヒッタイト語の文法が比較的簡単だということを先に申しました。動詞組織の法（ムード）には直説法と命令法だけがあり、例えば、話者の意志と未来を追加的に表現する接続法（subjunctive, Konjunktiv）、可能と願望の機能を持つ願望法（optative, Optativ）とこう系列がありません。ゴート語、北欧語、ドイツ語、英語等を含むゲルマン語は本来「達成された状態」を表していた完了語幹（perfect, Perfekt）を過去形の基本にしていますが、完了語幹はヒッタイト語の一部にも前提とされず。

一九八〇年代には「ヒッタイト・ゲルマン型」という仮説が（再）注目され、ヒッタイト語やゲルマン語に見られる簡単な組織が基で、インド・イラン語派やギリシャ語派に見られる複雑な組織は二次的な展開だとする説が挑戦的に提出されました。ヒッタイト語を中心とする研究者の中には、今日でも無論この種の主張をする人たちがいます。しかし、当時「グレコ・アーリッシュユ」、「グレコ・アーリヤン」と呼ばれた旧来のインド・ヨーロッパ祖語の復元形に見られる一つ一つの形態要素を、共通の遺産からではなく二次的な形成から説明することは事実上困難です。ある文法的要素を組織として構成する仕方にはいくらでも変更、更新の可能性があります。しかし、それぞれの

組織を構成する具体的語形やそれを組み立てている形態要素をどこから採ってきたのか、と問う問  
いには答えられなくなるでしょうし、痕跡として残る個別的な語形、形態素の説明も困難になるで  
しょう。

例えば、現代ドイツ語の接続法 (Konjunktiv) II とⅢのは過去の願望法 (Optativ)、基  
本的にはすなわち、ゲルマン語が過去形として一般化した完了語幹の、そのいわば二階に印欧  
祖語起源の願望法の形成法を一般化した結果と考えられます。願望法の語幹接尾辞 (Suffix) は  
\**-jehi-*/\**-ih-*と典型的なアップラウト (母音の出入り) を示し、既に祖語段階にあったと仮定  
する必要があると見えます。ゲルマン語の場合にはその弱い形を一般化して採用してはいますが、印欧祖  
語にあった願望法の接尾辞に由来することは明らかで、二次的に作り上げられるものとは思われま  
せん。例えば、インド・イラン語派で貫徹し、スラヴ語派の多く、バルト語派の一部を巻き込んだ  
ルキ *lyka* の法則 (*lyka* の母音または子音形、*ly* 列の音の後で、ス [s] 列の音がシュ [ʃ] 列の  
音に変化する現象) などは二次的波及から説明できますが、そのような歴史的位置関係を前提とし  
ないある語派とある語派との間に、偶然一致して起こるとは考え難い諸々の二次的改変や、その基  
になる部材が発見されます。その場合、少なくとも萌芽のようなものは祖語段階に想定せざるを得  
ません。ヒッタイト語を含むアナトリア語派が先ず分岐したとする「インド・ヒッタイト」説も古  
くから提唱されていますが、結局は分岐の年代を匙加減する程度の問題、それもその都度問題にし

ている文脈からの発言という印象を免れません。

また、年代的にも、印欧祖語から各語派がほぼ一致して分岐したと考える方が合理的でしょう。各語派が各地に登場する年代を考えますと、ヒッタイト語からの借用語がアッスイリアの商業文書に現れますので、この語派の存在は少なくとも紀元前二〇〇〇年より前まで遡ります。しかし、先に触れましたように、「インド・イラン語派」も、紀元前二〇〇〇年頃には既にそのようなものとしてどこかにあつた筈です。ギリシャのミュケーナイ文書はギリシャ語ですから、紀元前十四世紀には既に地中海の各地にギリシャ語を話す部族の植民地化が起きていたこととなります。ギリシャ語共通時代を想定すれば、やはりこれも紀元前二〇〇〇年頃になるでしょうか。スラヴ語派が形を取るのは紀元後一〇世紀近くになってからで、それ以後拡大し諸方言を形成しますが、それまで分岐せずに他の語派と一緒にいたわけではありません。ということになりますと、アナトリア語派が先ず分かれて、その後、やがて他の語派を形成するに至る残りが例えば紀元前三〇〇〇年近くまで一緒にどこかにいて複雑な文法体系を完成し、そこから拡大が始まって……と考えるのは不可能とは言えませんが、不自然です。言語学の資料とそれ以外の知見とを総合して、もう一度考え直さなければならぬことは勿論です。

従つて、ヒッタイトの人たちが願望法をなぜなくしたのかという問いに答えられれば、その方が説明が簡単です。その場合、印欧語族の派遣部隊に想定される、未成年の男たちを追い出し、新天

地を求めさせるという方法と関連する可能性が考えられます。正確厳密な文法に則った印欧語は非常に使いにくい言語です。色々な意味要素を語形、形態で処理しますので、例えば単数が複数か、現在か、進行中で表現するのか動作だけを表すのか、その断定形か、などなど、予め表現すべきカテゴリーが決まっていなくて一言も表現できない言語です。ギアチェンジに喩えれば、入れるべきギアに入れなければ動きません。話しながら必要に応じて後で付け足すことができませぬ。ですから、相当訓練を経なければ使い切れない、特別教養のある人たちの言語が残されていると考えられます。そのような印欧語習得の途中で、何らかの理由で追いつけられなかったか派遣された人たちが他の言語集団の中で簡単な文法の言語を使用したのではないか、という推測が、かなり昔からなされました。ゲルマン語派の所謂弱変化動詞の過去形は、名詞の格形に「する、作る」を意味する動詞の完了形を付加したものに廻ります。つまり「歩いた」と言う代わりに「歩きました」、「した」と表現するわけです。子供のことばなどによく見られる日常語の簡単な表現が、二次的に体系化されることはどこにも見られ、かつ、跡付けることのできる現象です。

遠征と植民地ということでは、日本には南部藩の起源の話があります。新天地を求めて開拓するということは日本の歴史には稀であるが、例外が南部藩の始まりだということを司馬遼太郎が『街道を行く3—陸奥の道—』に書いています。南部藩の元は、今の山梨県の南部町にあたる南部の郷の若者たち何人が新天地を求めて船出し、北へ向かって進み八戸付近に着き、現地のコン(昆